

二十一世紀の新しい人間像

－ 抑圧された感性の復活による知性との調和的統合 －

加 藤 孝 義*

A New View of Personality for the Twenty-First Century: Necessity of
A Harmonic Integration Between Repressed “Kannsei”, and Intelligence

Takayoshi KATO

西欧の合理主義思想がもたらした現代社会のテクノロジーは、確かに人類の福祉・幸福に多大な恩恵をもたらした。しかし、これによる知性偏重の弊害が感性という人間性の側面損なう負の遺産をもたらしたことも事実である。本論では、この抑圧されていたともいえる人間性を支える感性を復活させ、それと知性との調和的統合こそが、来るべき世紀の人間像として重要な意義をもっているという新しい人間観を、知性と感性の相互関係のモデルを試論的に考え提案した。

キーワード：知性と感性、人間像、能動的言語意識モード、受動的沈黙意識モード

はじめに

人間に対してどのようなアプローチの仕方をするかは、「人間像」をどう考察するかによって多様な視点が可能である。このような視点の中でも、「人間はいかに生きるか」の課題と関連する見方も極めて重要なものであるとの見解には異論がないところであろう。

「人間はいかに生きるか」の問題は、優れて個人的な課題であると同時に人生には時間的不可逆性という抜き差しならぬ制約が存在するため、人は自らの生き方を敢えて問いかけ、この難問に苦闘する宿命を負っている。幾多の艱難辛苦にもめげず素晴らしい生き方をした先人たちの生き様に感動したり励まされたりして、人生への生きる意欲を新たにすることもしばしば経験するところであるが、なかには自分の生き方に対する真の価値を見出せずに挫折してしまった人たちの例も数知れない。

人生の生き方・意義・価値への真の取り組みは、人間特有の「自己意識」のために、この意識が芽生える青年期に始まる。このような人生の中での自分自身の位置・立場などを自らの力で確認しようとする自己確認のための意識は、最近ではアメリカの精神分析学者E.エリクソンの「アイデンティティ（自我同一性）」の術語によって語られるのが一般的となってきた。彼の考え方は、老年期の人が迎える心理社会的危機にも適用され、人生の終焉を迎えるに当たって、それを自分自身の責任において肯定的に受容するか、あるいは絶望のうちに終焉を迎えるかの、人生の最終課題をも解決しなければならないアイデンティティの問題としても話題

* 総合人間科学部 人間心理学科

になってきているところである。

ところで、「人間はいかに生きるか」という課題は、上に述べたような個人の生き方と同時に、われわれ人類の歴史にも非常に関連深い問題である。個人的生き方の視点は、数多く公刊されている人生論・偉人論の類書にゆずり、ここではこの問題を時間的にかなりマクロな世紀的単位の歴史的人間論の視点から考察したい。

自由をわれらに

現代のわれわれの生き方に最初に深く関わった問題は、「自由の獲得」であったと思われる(E.Fromm,1941; 訳書, 1951)。フロムによれば、人間と自由との根本的な関係は、神話における人間の楽園追放にはじまる。男と女は平和の楽園エデンの園において、お互い同志、また自然とも全く調和して生活している。そこでは労働の必要もないし、選択の自由も思考もない。人間は善悪の知恵の木の実を食べることを禁じられている。ところが、この禁を破ることにより、神の命令に背いて強制から自己を解放し人間的な自由を獲得はしたものの、それと同時に人間的苦悩を背負うことになったと言うのは、神話の語るところである。

他方、中世末期以降のヨーロッパの歴史は、個人の完全な開放史である。中世社会においては、個人的自由は全く欠如していた。当時、人は誰でも社会的秩序の中に自分の役割が組み込まれており、社会的にみても一つの階級から他の階級への移動の機会ほとんどなく、町から村への地理的移動ですら不可能であった。職人の個人的・経済的生活もすべて規則と義務とに拘束され、個人の自由な活動の余地はなかった。

近代的な意味での自由は存在しなかったが、中世の人間は孤独ではなく、孤立してはいなかった。ひとは誕生時から社会全体の中に根をおろしていたので、人生の意味は疑う余地のない、また疑う必要もないものであり、人は百姓であり、職人であり、騎士であって、偶然そのような職業をもつことになった個人的意識は存在しなかったのである。

ルネッサンスや宗教改革、産業革命そして資本主義の発展は、中世の封建体制を崩壊させ、人々に個人主義的意識をもたらした。人間はそれまで享受していた生活の安定性と帰属感を奪われ、個人的自由を獲得はしたが、この解放のために、逆に、人間としての個人的孤独と不安に苛まれることになった。近世から現代にいたる人間の歴史は、政治的体制の圧力によって自由を脅かされる不安と、自由が孤独と不安をもたらし、そこから逃れたいという心理の矛盾する自由の二面性に直面した人間の歴史でもある。

孤独な現代人

アメリカの社会学者D.リースマンは、主として17世紀以降のヨーロッパ・アメリカ社会に対して人口統計学的資料を基にして歴史学的考察を加え、そこに三つの異なった段階の社会が誕生し、それぞれの社会に共通した人々の同調性が働く「社会的性格」が存在すると指摘した(D.Riesman,1961; 訳書, 1964)。

リースマンによれば、第一の社会は、農業・狩猟・鉱業などのいわゆる第一次産業が優勢な社会であり、この社会に典型的な社会成員は、その社会の伝統にしたがうことでその社会の中で生き延びることを保証されるので、この伝統を忠実に守る「伝統志向型」の社会的性格をもつことになる。このような社会は、あまり社会的変動を受けることが少ないから、過去何世紀にもわたって受け継がれてきたその社会の伝統的行動様式、儀礼、日常的慣習、宗教などに服

従し、それから外れてはならないという方向に、その集団の性格が発揮される。このことによって、その社会の安定が維持されるのである。

第二の社会は、その社会成員が「内部志向型」といわれる社会的性格を持っている社会である。この社会は、第二次産業である工業化が著しく進行する結果、その社会を構成する成員の流動性が増大し、資本の急速な蓄積と生産の拡大が生じ、外に向けては、探検、殖民、帝国主義といった形で拡大が生じる社会である。こうした社会では、その成員の選択の幅が以前より格段に広がっているし、またこのような新しい社会的状況では、より確実なイニシアチブを要求されることから、そこには新しいタイプの性格を持った人間が登場することになる。それが「内部志向型」の性格と言われるものである。社会の分業と社会的階層化が進行するにつれ、従来の伝統はバラバラに割れながらも存続するが、従来から与えられてきた伝統以外にも、それに対抗するような伝統が存在することを自覚せざるを得ない。こうした事情から、個人は変動して止まないさまざまな社会的要求に適応するだけの柔軟さを持つようになり、逆に環境により多くの変化を要求するようにもなる。

第三の社会は、商業、コミュニケーション・サービスが優勢な社会で、アメリカや日本を始めとする先進工業国の都市の人間に広く観察される「他人志向型」の社会的性格を生み出している社会である。このタイプの社会的性格に共通する個人の生き方を決定するものは、同時代人であるところに特徴がある。それは、直接の知り合い、友人、マスメディアを通じた人物からの影響であってもかまわない。このタイプの人たちの生涯を通して変化しないものは、かれらの努力のプロセスそのものと、他者から送られる信号に絶えず注意を払おうとするプロセスであり、このことによって行動面での同調性が生じる。この同調性は、伝統志向型の人が行動を意識的に訓練することによって生まれるようなものではなく、むしろ他人の行為・願望にたいする驚くべき感受性によって、知らず知らずのうちに身についていくようなものなのである。

現代の日本社会は、この第三のタイプ「他人志向型」の社会的性格と大変深く関わっていると思われる。他人志向型の人間は、両親のような小さな世界からよりも、はるかに広い世界からの情報に反応することを学習する。個人にとって家族はより広い環境のごく一部に過ぎない。そして個人は子供時代から、この広い世界に対して注意深い観察をしてきている。伝統的志向型の社会にあっては、自分の身近なものとの見知らぬものとの間には、明確な境界線が引かれていたのであるが、他人志向型の人間にとっては、このような境界線はもはや存在しない。個人はコスモポリタンなのである。個人はどのような場所でも生きていけるのであるが、逆にどのような場所にも精神的安住の地はないともいえる。他人に対して感受性を高めているために、世界からの過剰な情報に晒され、その情報の感受性によって絶えず「不安」を覚えることになるからである。

テクノロジー偏重の人間観の破綻

西欧社会におけるこれまでの世界観は、「知性はもっぱら合理的なものである」という、いわゆる西欧的合理主義であり、これに基づくさまざまなテクノロジー（科学技術）の発展は多くの文明の利便性をもたらし、人間の幸福と福祉に貢献してきたことは疑う余地がない。しかしこの文明性とは裏腹に、一方では自然を始めとする致命的な環境破壊・公害（最近では、地球温暖化）を発生させ、他方では、文明が人間性を損なう「人間疎外」といわれる人間の精神

をも蝕む人間性の破綻という重大な結果を招くことになり、テクノロジーとそれに基づく文明・経済至上主義が必ずしも人類の最終的幸福・福祉をもたらすものではないことに思い至ったのである。このようにして西欧的現代社会は、それまで疑う余地がないと確信して追従してきた知性偏重の世界観・人間観に限界を認めざるを得なくなってきた。

日本社会の現状

人間の生き方が問われた歴史的問題をマクロな時間的展望の中で考察した場合、現代社会に関連する問題の一つは自由の獲得であった。さらに前世紀以降とりわけ深刻な問題を提起したのは、テクノロジーや経済的効率至上主義の負の面をもたらした公害・人間疎外という人間の生き方に根本的に関わる重要な思想の行き詰まりに関するものであった。これらの問題と日本の現代社会は密接な関係を持っているとみられる。

日本社会の現状は、全体主義や専制主義の支配の下に世界中でなお自由を剥奪されたり、制限されたりしている国々がある中では、自由と平和が一応市民の手の中にある社会と言ってよいであろう。しかし、ここにも問題はある。フロムの指摘のように、現代社会のわれわれも自由のもたらす不安と孤独に対処しなければならない状況を招いた。社会において生きるための選択の自由が多いということは、皮肉なことに自由をもてあましそこから逃避しようとする心理さえ働くことがあるのは、先例にこと欠かない。身近な例としては、大学生の「五月病」、青年の「ひきこもり」、定年がもたらす「引退神経症」、サラリーマンの「日曜神経症」などが列挙されるが、社会的階層や国家レベルの歴史的事例も看過できない。ヒットラーの独裁に協力したナチス党员、第二次世界大戦の日本社会などは、このレベルで考察される現象として容易に想起される事例である。

これらの問題は、フロム（E.Fromm,1947; 訳書,1955）が提唱する人間存在の基本原理の欲求にかかわるものであり、われわれは「赤信号みんなで渡れば怖くない」式の集団主義や権威によって進むべき方向づけを示されるほうが、孤独の不安、選択の不自由を回避できて、安心して生きられるという集団心理が働く。孤独や不安への対処の仕方というのは、いわゆるアイデンティティという個人的な人生の課題なのであるが、フロムの言うように、このような集団への方向づけの枠組みは、合理的なもの非合理的なものを問わずに、そういったものに服従しがちな本性がわれわれの心の中に存在することを認識しなければならない。これまでこの集団主義に大いに依存してきた日本社会は、それが機能しなくなった時代を迎え、政治・金融・経済・教育などにおける従来のさまざまなシステムの疲労・崩壊が進行中であることは、もはや周知の事実になりつつある。

日本の現代社会はまた、さまざまなメディアを通じた情報が氾濫している社会でもある。こういった情報に対する感受性が高い他人志向型の現代人は、情報の選択の自由度がありすぎるために、かえってこれらの情報に振り回される傾向があり、情報の多いことがかならずしも精神的安心を保障することにはならない。日本社会はこのような過剰な情報に晒されているだけでなく、さらに高齢化現象、少子化、家族制度の激変による家族形態の変貌などの複合的な社会的影響が浸透してきている。そして人間が基本的に持っていることが必要とされる人間的なコミュニケーションが欠落してしまう社会的環境が現実のものとなっている。人間的接触の飢餓状態にある孤独な老人が、親切をエサに取り入ったセールスマンにトラの子の金品を騙し取られる、孤独な学生に取り入って高額な買い物をさせるキャッチ・セールスの被害などは、人

間としての基本的欲求が充足されていないことからくるもので、論理的理屈では理解できない。

先導的新思想の模索

知性は専ら合理的なものであり、これに基づいたさまざまなテクノロジーの成果により、文明生活をもたらして人々を幸福にしてきたというのは、西欧社会を中心とする先進諸国でのゆるぎない世界観であった。しかし抜き差しならぬ自然破壊や公害をもたらし、また人間疎外による人間の精神的病理をももたらすことによって、この絶対的とも思われていた思想の確信は、その行き詰まりを感じ確信もゆらいできた。

そこで、この西欧合理主義とテクノロジーを中心とした知性偏重の思考法から脱却し、来るべき世紀の新しい人間像として中東や東洋の世界観に目を向け始めたのである（R.Ornstein,1972; 訳書, 1976）。

このような傾向を招いたことには、それまで非合理的なもの、迷信の世界、奇妙なものとして西欧の合理主義が排除或いは無視してきた伝統的秘教心理学の成果に対して、西欧の科学者たちが冷静に対応するようになってきたことがある。例えば、ヨーガの達人たちが身体部位の体温を意識的に変化させたり、血圧を下げたりすることができるという報告がインドから西欧に伝えられてきた。身体の「不随意機能」は意識的にコントロールできない（だから不随意という）というのが、これまでの西欧の科学的知識の基本であったので、西欧の科学者にはこのような報告は容認しがたかったのである。しかしかれらは自らの科学的手法によりこのような報告を実際に確認して、その科学観の変更を迫られることになった。このような生理学的コントロール法のほか、身体姿勢・体位法・呼吸法による意識のコントロール、「気」エネルギーの活用法など、西欧の合理主義思想からすれば、迷信と魔術の世界に整理されてきたこのような世界が、西欧の科学においても理解される機運が生じた（Ornstein,1972）。

このような秘教の心理学的修練は、西欧の教育システムが持っていない側面に関する訓練システムである。西欧の教育システムが「言語の能動的モード」の中で機能するのに対して、それは「受容的な沈黙のモード」で一般に機能するようにみえるものである。中国の易経における「坤」、スーフィ教の「直接的知覚」、禪の「見性」などの言葉は、このような「沈黙の言語」の中で機能するのである（Ornstein,1972）。

また身体運動・音楽・空間的形態・音響・工芸・夢・物語などによるさまざまな技法にも、このような心の世界の働きに関するものがある。例えば、スペインのアルハンブラ宮殿、ムーア人の寺院、ヨーガの曼陀羅などの空間的形態は、人の右脳半球の活性化や注意集中的瞑想の焦点化に役立っており、織物・陶芸・書道なども、空間的・直感的モードを引き出すのに利用される。さらに中東や極東の音楽は、西洋音楽のような旋律的なものではなく単調で退屈なものではあるが、しかしその楽音の質そのものが重要なのである。このような音楽におけるある周波数の振動が、一般には触れられずに過ぎてしまうわれわれの心の部分を揺り動かすとみられている。ヨーガの呪文・托鉢僧のコールなども、われわれの意識にある種の効果を発揮するような音声を内包していることが指摘されている（Ornstein,1972）。

他方、中東に見られる物語やおとぎ話も西欧的な論理性はもたず、また線的時間秩序も意味を持たない夢の中で見る論理のような特徴があって興味深い。二、三例を挙げてみよう（Ornstein,1972）。

<例1.> 「ナスラディンは、リュートの演奏を覚えることに興味を持った。彼はリュエ

トの師匠を探し出し、レッスンのために幾らの謝礼を払うのかを聞いた。師匠は、“最初の月は10枚の金貨、それ以降の月は1枚の金貨”と答えた。“それはすばらしい。私は二番目の月から始めることにしましょう。”とナスラディンは言う。」

＜例2.＞「ある男が、ナスラディンが地面を何やら探しているのを見ていた。“何を探しているのですか?”。“鍵です。”とナスラディンは答える。そこで彼ら二人は、ひざまずいてそれを探した。しばらくして、その男はたずねた。“どこで、確かにそれを落としたのですか?”。“私の家の中です。”、“それでは何故ここで探しているのですか?”。“私の家の中よりこの方が明るいからです。”」

＜例3.＞「ナスラディンは治安判事に任命される。最初の訴訟で、原告が非常に積極的に弁じたので、彼は“私はあなたが正しいと思います。”と叫んでしまう。法廷の事務官は、被告の言い分が未だ聞かされていないのだから、自制するように求める。被告の雄弁さに非常に感動させられたので、被告の証言が終わるや否や、ナスラディンは“私はあなたが正しいと信じます。”と大声で言う。法廷の事務官はこれに服することができないので、“閣下、彼ら二人が正しい筈はありません。”と言うと、ナスラディンは“君が正しいと信じます。”と言うのである。」

これらの物語は、普通の論理や線の時間は意味を持たないこと、また何かの新しい考えに興奮してすぐ飛びついて、他のものは捨て去ってしまうわれわれ西欧社会の心理的世界、さらには人を裁くときには、「あなたは間違っている」という前提で判断してしまう傾向などを指摘しているとみられる。一層高い観点から物事を見た場合、そうでなければ反対にみえる多くの見解が、それぞれ補足的なものとして捉えられる可能性もあることを示唆した物語である。

「左脳文化」「右脳文化」の比喻

前世紀の人間に関する最大の科学的発見といわれる大脳半球機能差（ラテラリティ、側性分化とも）が、脳の器質的障害の研究から明らかになり、それがわれわれの世界観・人間像・文化とも密接に関係していることが知られるようになってきた。人間の左脳半球の働きは、ものごとの分析的・論理的思考、特に言語的・数学的思考能力に深く関わり、その情報の処理の仕方は、時間的に継時的・線的であるところに特色がある。他方、これに対して右脳半球の機能は、われわれの全体的精神機能と密接に関連し、空間における方向の判断のような空間認知、絵画鑑賞・彫刻などの芸術的活動、身体動作、他者の顔を認知するなどの情報把握と関連していて、その情報処理の特色は、同時的・全体的である。

このような大脳半球機能の2側面は、心の二重性（心の昼と夜）を反映していると考えられようになり、それがまた西欧の知性的合理主義的文化（比喩的に「左脳文化」と呼ぶことにする）や中東・東洋の秘教心理学的な文化（同様に「右脳文化」と呼ぶ）のような異質的文化の基礎を作っているのであると認識されるようになってきた（表1.）。

表1. 意識モードについての試験的2分法 (R.Ornstein,1972,p.67)

＜提案者＞	＜区	分＞
意識のモード	能動的モード	受動的モード
多くの出所:	昼	夜
ブラックバーン:	知性的	感性的
オープンハイマー:	時間、歴史	永劫、無窮
ディクマン:	能動的	受動的
ポランイ:	明示的	暗黙的
レビイ、スベリー:	分析的	ゲシュタルト
ドンホフ:	右(身体の側)	左(身体の側)
多くの出所:	左半球	右半球
ボーゲン:	計画的	無計画的
リー:	線的	非線的
ルリア:	継時的	同時的
セムズ:	焦点的	瀰漫性
易経:	創造的なもの:天	受容的なもの:地
	男性、陽	女性、陰
易経:	明	暗
易経:	時間	空間
多くの出所:	言語的	空間的
多くの出所:	知性的	直観的
ベーダンタ哲学:	知性	心
ユング:	因果的	非因果的
ベーコン:	論証	経験

西欧の論理的合理主義の思想は、大脳半球機能からみれば、知性的・分析的・論理的・言語的・焦点的な精神機能を重視する人間像・世界観につながり、西欧の文化はいわば左脳偏重の世界観をもった文化圏を形成してきた。この文化では、科学性、客観性、実証性が重視されるので、非論理的なもの、不合理なものは無視されたり軽視されたりしてきた。われわれの心の働きに対応させてみれば、西欧の科学者たちは心の“夜”の部分が無視して、もっぱら心の“昼”の部分のみの研究に従事し、陽の当たる場所、昼の世界に焦点を当てた領域を重視してきたことになる。(Ornstein,R.1972)

西欧や日本における教育もまた、主として読み・書き・算数のような知性的側面から成立していて、われわれの心のもう一つの側面、夜の世界である感情・身体・直感的能力・感性などに関しては、教育の主眼とはならなかったのである。他方、禅・スーフィ教、ヨーガなどのいわゆる秘教の原理の伝統を守る多くの人々は、西欧の合理主義的人間の理解は、その本性を理解していないとして、この問題を打ち切ってきたきらいがあった。

抑圧された感性（右脳）の復活による知性と感性の調和的統合

今から40年ほど前、かの歴史学者トインビーは日本に対して「高度の精神社会を求めるか、物質文明追求の果てに没落の道を進むか。」と提言したと言われるが、それ以降もこの問題は問われ続けていたのである。先進諸国とりわけ日本において顕著であるが、学歴偏重、管理主義、画一化への圧力、人間関係の疎遠化、道徳意識の希薄化、拝金主義、経済効率至上主義、有害環境の拡大など過度の合理主義追求と知性偏重という、いわば「左脳文化」に強く傾斜した人

間像は、人間性の一面に偏重したアンバランスなものとなり、それは文明的曲がり角・袋小路に達していたとみななければならない。現代人の心の中に無意識のうちにこの歪から逃れて真の人間性を回復したいという背景、換言すれば、「感性の復活」への希求が、潜在していたとみられる。

このような時代的背景が、右脳半球に内在する抑圧された感性の回復を求めた結果、知性とは裏腹な関係にあるさまざまな身体的修行、太極拳、ダンス、宗教的修行などのような知性の歪から身体の回復を通して人間性を回復させるものへと、スポーツ選手とは無縁なごく普通の人間にも広く行きわたる土壌を提供したとみることができる。このような身体的修行は、単なる知識の獲得のような努力と異なり、身体的修行による直接的感性的な身体的変化の達成感を実感できるために、精神の充実感をも同時に体験されることになる。このために、精神の安定感を実感し、人間疎外感からも解放されたという心境になる。青年たちが新興宗教に入信した動機も、おそらくかれらの意識的理解を超えていたであろうが、このような背景と無縁ではないであろう（鳥田, 2001）。

右脳半球活動の復権の問題は、これまであまり気づかれていなかった課題である。われわれの身体は地球物理的環境からさまざまな影響を受けているのであるが、感覚器官はその僅かな部分のみを感知できるに過ぎないからである。そのために、非常に恒常的で変化の遅い地球の明暗のリズム・生物学的リズム・大気汚染・重力など影響は無視されやすいのである。例えば、日中よりも夜間のほうが呼吸器の疾病に罹患しやすいこと、女性の月経期の頭痛による注意力の低下、抑うつ感情、夜型の人々のリズム、「時差ボケ」（学術的には、これ以外の問題を含めて「非同期症候群」という。）などはこのような課題である（Ornstein, R. 1972）。

われわれが室内で憂うつになって、窓を開けて新鮮な空気を取り入れたりするが、この場合の室内には、大気プラスイオンが増加していることが原因であることも知られてきた。秘教心理学派の修行者が長年にわたり、山頂・滝・太平洋の近くに居を定めて修行してきたのも、これらの場所が生气と関連するマイナスイオンに満ちているためであることも、西欧の現代科学によって解明され、その生物学的意義が確認されている。また身体エネルギーの活用法は、合気道・太極拳・空手などによって発展させられてきたが、今日では、さらに無重力（量）の影響も人間理解の視野に含める必要が生じている（Ornstein, R. 1972）。

結論的に言えば、知性・論理的合理主義・経済効率至上主義にのみに偏重するいわば「左脳文化」に象徴されるような人間像のみでは、われわれに対して直接自己主張することはないが、沈黙のモードで機能する人間もう一つの重要な側面である感性、すなわち比喩的にいえば「右脳文化」とのヴァランスを欠いていることになる（図1.）。

人間の全体的存在がヴァランスのとれた統合的調和的人間性を獲得するには、われわれは右脳機能と左脳機能との間に調和のある存在となる必要がある。脳の調和の問題をさらに進化論的見地からみれば、前頭連合野の発達が特に人間特有なものであるが、この発育不全が調和の



図1 陰陽シンボルによる知性と感性の関係の象徴的表現

ある人間性の発育に障害をもたらすという指摘にも傾聴しなければならない。幼児教育が知育一辺倒になったり、テレビ・ゲームづけになる環境は、社会性や理性の発達の障害になるので、幼児が実際にけんかをしてみたり、運動会で騎馬戦や棒倒しのような身体経験によって、感性和知性とのヴァランスを獲得する必要があるとの指摘も傾聴に値する（澤口, 1989）。感性の復活によってヴァランスのとれた全体的統合的調和的人間存在となるための必要条件であるという見解は、21世紀における人間存在の極めて重要な一つの視点を提供するものであると言える。

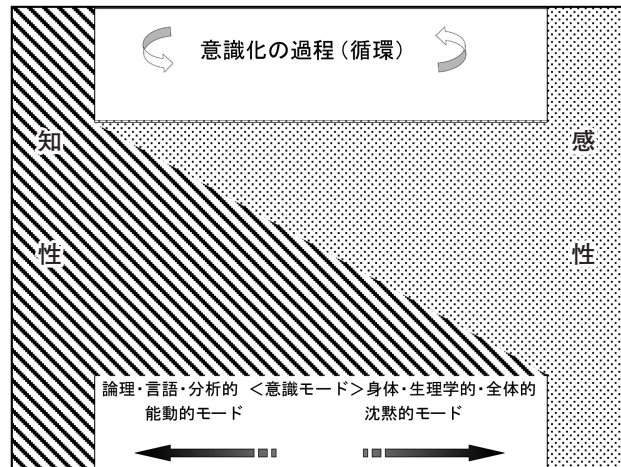


図2 知性と感性に介在する意識モードの相互関係

図2の左側の極は、論理・証明・洞察などのいわゆる論理分析的思考の側面を示し、これと対極の右側の極は、イメージ・受容的な感覚反応の側面を示す。知性の側は、能動的な意識がはたらくのに対し、感性の側は必ずしも意識活動を伴うとはかぎらない。環境・情報への反応として応答する。この二つの極の間には循環過程が介在し、それぞれの極に近いほど反対の極の作用は減少する。例えば、知性にかかわる言語作用の最も少ない例は、「感性言語」といわれるものであり、「ピカピカ」「ドンドン」などは言語を使用しているが、これが特別な言語的意味をもっているわけではないのに、感性に訴える力があり、言語的意味合いを感じるのである。また、この極には抑圧されている無意識のモードがあり、「解離性意識障害」に例示されるような心的世界が広がっている。

付記：本論は、加藤（2001）に新しい説明モデルを図案化して示し、更に詳論したものである。

文 献

- フロム E.；日高六郎（訳）『自由からの逃走』昭和 26, 東京創元社
 フロム E.；早坂泰治郎（訳）『人間における自由』（1955）、東京創元社
 加藤孝義 秘教の瞑想と西欧の現代心理学－意識のモードをめぐって－（1990）、「近代諸科学からみたインド思想の批判的分析（平成元年度特定研究報告書、研究代表者・佐藤道郎、岩手大学）」1-35.
 加藤孝義（1993）「求められる新しい人間像」、雑誌『Agama』：特集－人間はいかに生きてきたか；その存在原理を求め－、No.125、45-58、阿含宗出版社
 加藤孝義（2001）二十一世紀の新しい人間像－抑圧された感性の復活による知性との統合－東北福祉大学研究紀要 第 20 卷 187-206
 鬼澤貞・木原孝・加藤孝義（編著）（1983）加藤孝義 13. 意識, 216-232. 『人間の心理学』、アカデミア出版会

- Ornstein,R.E. (1972), The Psychology of Consciousness,W.H.Freeman and Company,
北村晴朗/加藤孝義 (共訳) (1976) 『意識の心理』産業能率短期大学出版局
リースマンD・加藤秀俊 (訳) (1964) 『孤独な群衆』みすず書房
澤口俊之 (1989) 『知性の脳構造と進化』海鳴社
杉下守弘 (1983) 『右脳と左脳の対話』青土社
島田裕巳 (2001) 『オウム-なぜ宗教はテロリズムを生んだのか』トランスビュー